

# 中友會 通信

vol.12 2026.5

揮毫 福田康夫 元内閣総理大臣、中友会最高顧問

 **DuanPress**  
日本僑報社 発行  
since 1996

問い合わせ先 中友会事務局  
豊島区西池袋3-17-15 湖南会館  
Tel : 03-5956-2808  
Mail : zyh@duan.jp



## 鄧小平先生との出会いと日中交流

—— 日本財団 尾形武寿会長インタビュー ——



笹川平和財団の設立や、笹川日中友好基金をはじめとする数々の基金の設置など、長年にわたり中国との交流に携わってきた日本財団の尾形武寿会長。1984年の初訪中から始まった41年間の歩みは、鄧小平氏との会見をはじめ、数々の歴史的な出会いと経験に彩られています。

今回のインタビューでは、その原点となる出来事や当時の中国の姿、日中関係への思いを振り返り、長年の実務を通じて尾形会長が築き上げてこられた日中交流の実態と意義に迫ります。  
(聞き手：段景子)

**Q 1 : 尾形会長と中国との関わりはいつ、どのように始まったのですか？**

**尾形武寿 (以下、尾形)** 1984年に初めて中国を訪問して以来、私は日中相互理解の促進を目的とするさまざまな事業に携わってきました。それから41年に及ぶ中国との関わりは、私の人生において極めて大きな位置を占めています。どの事業にも生みの苦しみがああり、それぞれに固有のエピソードと深い思い出があります。

**Q 2 : 中国との本格的な接触のきっかけは何だったのでしょうか？**

**尾形** 私が本格的に中国と接触するようになったのは1984年のことです。中華人民共和国の元外務部長であり、同国初代国連大使を務めた黄華氏の夫人・何理良女士が、国連人口基金の国際会議に出席された帰路、日本に立ち寄り私に会いたいと連絡をくださいました。その要請を受けて東京・麻布の中国大使館を訪問し、約二時間にわたり会談を行いました。主な議題は「笹川良一先生の訪中可能性」についてでした。

**Q 3 : その後の訪中はどのように実現したのでしょうか。**

**尾形** その会談から半年も経たないうちに、笹川良一会長の戦後初となる中国本土訪問が実現しました。国家計画生育委員会の王偉主任の招待により、1984年11月11日から17日までの六泊七日の訪問でした。私にとっても初めての中国訪問であり、宿泊先は釣魚台迎賓館でした。

**Q 4 : 当時の中国の印象について教えてください。**

**尾形** 当時の北京は、現在の発展した姿からは想像もつかないほど質素で暗い街でした。行き交う人々は男女を問わず緑や灰色の人民服を着ており、主な移動手段は自転車でした。しかしながら、故宮を訪れた際にはその壮大で華麗な建築に大きな衝撃を受け、さらに万里の長城でも同様の感慨を覚えました。歴史の重みと文化の深さを強く実感した瞬間でした。

**Q 5 : 鄧小平先生との最初の出会いについて詳しく教えてください。**

**尾形** 特に印象深いのは、1985年10月30日午前11時に人

民大会堂の福建庁で行われた鄧小平先生との初めての会見です。このとき鄧先生は自ら入口の外まで進み出て笹川会長を迎えられました。これは極めて異例の対応であり、その誠意と重視の姿勢に強い印象を受けました。

**Q 6：会見ではどのようなやり取りがあったのでしょうか？**

**尾形** 会見の中で鄧先生は、「笹川先生、あなたと私は日中交流の過去百年の生き証人です。これからも日中のために協力していきましょう」と語られました。これに対し笹川会長は、「先生は中国のみならず世界にとって必要な指導者です。実年齢から六十歳を差し引き、二十代に戻ったつもりで世界平和のために共に協力しましょう」と応じました。両者の間で交わされた言葉は非常に力強く、歴史に残る重要な対話となりました。この会見は一時間以上に及びました。

**Q 7：その後の日中交流事業はどのように発展していったのでしょうか？**

**尾形** 日本財団はその後40年以上にわたり、中国において医療・教育・防災・文化など多岐にわたる分野でプロジェクトを展開してきました。投資額と事業数の規模は現存する交流団体の中でも最大級であると自負しています。私はそのほとんどすべての企画・計画・実行に関わってきました。

**Q 8：具体的にはどのような交流事業が行われたのですか？**

**尾形** 代表的な事業としては、日中笹川医学奨学金制度、中国市長訪日交流、ヤングリーダー奨学基金、日中鉄道分野の国際交流、教育研究図書の有効活用プロジェクト、自衛隊と中国人民解放軍の佐官級交流、笹川杯作文コンクール、全国大学日本知識クイズ大会などが挙げられます。これらは幅広い分野で日中交流の基盤を築いてきました。

**Q 9：特に評価の高い事業について教えてください。**

**尾形** 日中笹川医学奨学金制度は特に大きな成果を上げた事業の一つです。2023年7月時点で約2400人の中国人医療関係者が日本の大学や研究機関で学び、多くの修了者が中国医学界において学長や教授など重要な役職に就いています。この制度は「最も成功した民間協力事業」として高く評価されています。

**Q 10：政治的に緊張がある中での交流についてはどのように取り組まれてきましたか？**

**尾形** 政治的緊張が高まる局面においても交流の継続は重要です。例えば2001年には、自衛隊と中国人民解放軍の佐官級交流を開始し、防衛分野における信頼醸成に貢献しました。こうした取り組みは、対話の継続と相互理解の深化に大きな役割を果たしています。

**Q 11：これまでの活動に対してどのような評価を受けていますか？**

**尾形** 長年の活動が認められ、2018年には中国政府友誼賞、2019年には福建省名誉公民、さらに2024年には中国人民大学名誉教授の称号を授与されるなど、多くの栄誉を賜りました。

**Q 12：現在の日中関係についてどのようにお考えですか？**

**尾形** 日本と中国は地政学的に切り離すことのできない隣国であり、2000年以上にわたる交流の歴史を有しています。コロナ禍で一時減少した訪日中国人観光客も回復傾向にあり、文化・学術交流や若者文化の交流も再び活発になっています。その根底には長年培われた相互の親近感があります。

**Q 13：一方で課題についてはどう見えていますか？**

**尾形** 相互理解の不足は誤解や対立を生む要因となります。特に現代ではSNSやメディアの影響により感情的な反応が先行しやすいため、冷静で理性的な対話の場を持つことが極めて重要です。時には率直な議論を行うことも必要でしょう。

**Q 14：民間交流の役割についてどのようにお考えですか？**

**尾形** 民間交流は政治・思想・宗教・国境といった壁を越えて信頼関係を築く重要な役割を担っています。対立の芽を摘み取り、国家間の安定につなげる力があると信じています。こうした交流を世代を超えて継続していくことが不可欠です。

**Q 15：今後に向けた展望をお聞かせください。**

**尾形** 国交正常化から半世紀以上が経過した今、私たちは周恩来元首相の「和すれば益、争えば害」という言葉を胸に、共存共栄の道を模索し続ける必要があります。日本財団としても「友好から協力へ」を掲げ、人材育成、情報発信、人的交流の促進、さらには環境・防災・高齢化・社会保障などの共通課題への協力強化に引き続き取り組んでまいります。



**尾形 武寿**（おがた たけしゅ）

1967年東京農業大学卒業。社団法人日本船舶機械輸出振興会に入会し、マラッカ・シンガポール海峡の航行安全のための業務に従事。1974年からロッテルダム事務所長として、日本の船舶機械メーカーの海外進出に尽力。1980年日本船舶振興会（現 日本財団）入会。海外での業務経験を買われ、新設の国際業務課を任される。欧米や北欧諸国との間に二国間財団を創設するなど、海外協力援助活動の礎を築く。

1986年笹川平和財団を立ち上げ、総務部長として組織運営に携わる。日中友好基金をはじめとする数々の基金の設置に尽力し、1993年、総務部長として日本船舶振興会に復帰。豊富な経験を活かし、組織体制・業務運営の改善や監査体制の強化、日本財団への名称変更などに取り組む。1997年常務理事に就任。同年には民間では異色の独立系シンクタンクとなる東京財団を創設し、2005年に理事長に就任。2007年のモーターボート競走法の改正を受け組織変革と財団の健全化・透明性の確保への取り組みなど、笹川陽平会長の右腕として力を発揮する。2025年6月日本財団会長に就任、現在に至る。



中友会会員による  
中国滞在体験談

# 私の中国物語

「私の中国物語」その①

## 心より愛している中国

中学生・俳優 野間 美帆



2007年、自宅にてお手伝いさんとの餃子作り

突然ですが皆さんにとって母国とはなんですか？そしてその母国はどこですか？

私は0歳から8年間中国、北京で育ちました。つまり、人生の半分以上は中国で過ごしたことになります。そしてもちろんこれが私の「初めての中国」でした。世間一般から見ると私の母国は「日本」なのでしょう。私は父親も母親も日本人です。だから母国は日本だといわれます。もちろん何も間違ったことではありません。しかし、私は自分には母国というものはないと思っています。私にとって中国で育った経験はかけがえのないものでした。中国は私にとって第二の母親のような存在でした。だからこの先、私がまたほかの国で暮らしてそこがなくてはならない場所になれば、また母国のような場所が増えることになるでしょう。

私は中国でとてつもなく多くのことを学び、感じ、触れました。この経験の中にはいくつかつらかった経験もあります。その中でも一番苦労したことを挙げます。そ

れは言語の壁です。0歳で中国に行ったので自然に話せるようになったと周りにも言われますが、全くそのようなことはありませんでした。インターナショナルスクールに入学してから、中国語も英語も話す必要があり始めはなにもわからないままいろんな国の子とコミュニケーションをとるためにジェスチャーなどで必死になりました。そして次に直面した問題は日本での壁でした。中国語と英語を中心に日常生活をするようになり、次は日本語がうまく話せず大変な思いをしました。そして日本に帰国してからは学校生活でも苦戦しました。中国人だといわれたり、文化の違いでうまくいきませんでした。私にとってそれは大好きな中国に対する偏見のように感じて許しがたいものでした。でも今となっては、このような経験があってこそ自分の自分なのだと思っています。外国からの観光客が困ってれば、躊躇なく声をかけることができるようになり、自分の知らない文化にも興味を持つようになりました。

次に私が感じた中国の美しいところについてです。いまだに日本では中国に対して様々な感情を抱く人がいるようですが、私は一回中国で生活をしてみてからそのようなことを言うてほしいと思っています。私は中国はとてもあたたかくて人と人のつながりが強い国だと思っています。中国には忘れがたい大切な思い出が数えきれないほどあります。幼いころに近所のお花屋さんのお姉さんが髪をかわいくアレンジしてくれた。お手伝いさんがよく餃子や肉まんを皮から作ってくれた。道端のおじさんがいろんな面白い話をしてくれた。マンションのおばさんがかわいがってくれて一緒に遊んでくれた。書いても書いても書ききれないくらい多くの思い出があります。中国での生活、そして中国の人は私に「コミュニケーション」の大切さや「自分の個性の輝かせ方」、「グローバルな考え方」など学校だけでは到底学べない

ようなことをたくさん教えてくれました。さらに、私は良く感受性が豊かだといわれますがきっとその感受性は中国の風景、空気、食べ物、文化、人々など、中国の日本と異なった要素によって生まれ、研ぎ澄まされていったのだと思います。

今、日本人は中国に対してどのようなイメージを抱いているのでしょうか？ 少し前、私はある記事で日本人の93%が中国に対し良いイメージを持っていないという結果を見ました。この結果を見たとき、私はショックのような切なさのような複雑な感情を抱きました。そのように良いイメージを持たない日本人が言う中国とは果たしてなんなのでしょう。中国人なのか、政治家なのか、単純に国家なのか、環境なのか私にはこの答えを見つけることができませんでした。私はこの結果を見てから、もっと日本中の人に中国の魅力を知ってほしいと思いました。

私にはもう一つ疑問を持ったことがあります。それは日本の「メディア・報道」です。PM2.5の時期になると、必ず灰色のどんよりとした空に、全く景色が見えないくらの空気が映し出されていました。しかし、実際はそ

んな日ばかりではなく日本よりひどくても、きれいに青空が広がることも多々ありました。私にはそれが悔しくて得も言われぬほど景色が美しい日もあるのに悪いところばかりを取り上げるのかわかりませんでした。

私にとってこの中国エピソードは「初めて」の中国の思い出であり、「永遠」の思い出でもあります。私が日本に帰国して、ますます中国のことも、日本のことも好きになりました。そして愛する日本にこそ、私の基を築きあげてくれた中国ともっと親密な関係になって日中両国でこれから先の輝かしい瞬間や心苦しい瞬間も手を取り合せて共有できるような関係になれることが私の願いです。この作文がいつか、同世代の人にだけでなく幅広い年齢層の方々に読んでいただき、ほんの少しでも日中関係を支える架け橋になればいいと思っています。

#### 野間 美帆 (のま みほ)

2004年10月5日兵庫県神戸市生まれ。生後5か月で北京へ。9歳で日本に帰国。帰国後、中野区の公立小学校に転入。小学校卒業後、中学受験を経て私立女子校に入学。帰国子女コースに入る。合唱部で全国大会に出場。2018年4月、俳優を目指すため事務所のオーディションを受け、入所する。2019年1月、活動を続けるため文京区の公立中学校に転校。現在も活動中。

#### 「私の中国物語」その②

## ひょうたん笛を吹くたびに

ピアノ講師 森原 智美

2005年4月、中国の上海で反日デモが勃発しました。その際、日本総領事館にペットボトルなどが投げ込まれたり、日本料理店の窓ガラスが割られたりしました。私は、そのようすをテレビで観て、衝撃を受けました。主人の転勤で、これからこの地に住むことになるのかと思うと、不安に駆られました。

日本を立ち、初めての中国で印象的だったのは、タクシーの運転手がまるでホテルのように星の数によってランク付けされていたり、「マッサージ」ではなく「マッサージ」と書かれた看板を見かけたりしたこと。このような光景は、日本では皆無です。そのため、初めての中国での生活は驚きと意外性に満ちあふれ、毎日がとても刺激的でした。一方で、中国の人々に目を向けると、

彼らは年配の方を敬い、電車では必ずと言って良いほどお年寄りに座席を譲っていることに気づきました。また、家族や親戚との時間をとても大切にし、週末になると親戚を招いて大勢で賑やかに円卓を囲むことは日常茶飯事だと知りました。さらに、一度信頼関係を築くことができると、とことん尽くしてくれると聞き、とても親近感を覚えました。驚きの中にも、このような中国人ならではの素晴らしい国民性を肌で感じつつ、中国はいつしか「住めば都」となってゆきました。そうして一年が過ぎ、私は日本に本帰国することになりました。その時に体験した次の出来事により、中国は忘れられない国となりました。

私は、帰国に際し、中国での思い出にと、以前から吹

いてみたかった民族楽器のひょうたん笛を買いに行くことにしました。ひょうたん笛を売っている楽器店が密集している通りを友人が地図に描いてくれたので、それを持って出かけました。しかし、電車を降りてすぐさま、道に迷ってしまいました。そこで私は、目に留まったピアノの販売店に飛び込み、楽器店までの道順を片言の中国語で尋ねました。何人かの店員さんたちが、身振り手振りで口々に説明してくれましたが、私はその中国語を聞き取れませんでした。すると、そのうちの一人が「私と一緒にいきます」と言ってくれたのです。その方は、地図を何度も見て、時おり通行人に聞きながら私を楽器店街まで案内してくれました。お陰で私は、何軒かの楽器店をくまなく見て回り、念願のひょうたん笛を買うことができました。このように、親切に接していただいたことで、私の中国人に対するイメージは一変しました。つまり、「中国の人は優しい」と身を持って実感したのです。私はとても嬉しく、ひょうたん笛を買った後、コンビニエンスストアで中国人がよく食べているひまわりの種を買いました。そうして、道案内してくれた方がいるピアノ販売店まで戻りました。「給你<sup>ゲイニ</sup>」と言ってそれを渡し、買ったばかりのひょうたん笛を見せました。すると、その人はにっこり笑って「謝謝<sup>シェンシェン</sup>」と言ってくれました。「終わりよければ全てよし」。私の初めての中国での生活は、この出来事で終えることができ、とても清々しい気持ちで帰国の途につきました。

私の尊敬する永六輔さんは、「生きているということは、誰かに借りを作ること。生きていくということは、その借りを返してゆくこと」という言葉を遺されています。私たちは、生まれてから常に周囲の人たちのお世話になって生きています。周りの人たちに迷惑を掛けまいと思いつつも、人の手を借りなければならなかったり、知らず知らずのうちに人の手を煩わせてしまったりします。しかし、いつか誰かのためにその借りを返していくことが大切だと思います。中国での体験によって以前耳にしたこの言葉を思い出し、いつか日本で困っている外国人を見かけたら、今度は私が救いの手を差し伸べていこうと切に思いました。

帰国して数年後、私は娘を駅まで車で迎えに行きました。すると、娘が「中国人が乗る電車を間違えて困っている」と言って駆け寄って来ました。私は、数年前に中国で親切にしてもらったことを思い出し、`借り、を返せる絶好のチャンスだと思いました。私たちは、その女性を本来乗るべき電車の駅まで送ることにしました。彼女は、日本語がとても堪能で、将来のために憧れている日本で様々な勉強をしていると話していました。別れ際には、丁寧にお礼を言うくださり、「やっぱり日本人は優しい」と喜んでもらうことができました。私は、あの時の`借り、を返せた喜びだけで無く、中国人との縁を感じずにはいられませんでした。

ひょうたん笛は、和楽器の笙に似ていて、深みのある優しい音色です。それを吹くたび、優しい中国人のことが思い出され、私にとって中国は忘れられない桃源郷となりました。



森原 智美 (もりはらともみ)

1968年香川県丸亀市生まれ。1991年大阪音楽大学を卒業し、ピアノ講師としてカワイ音楽教室に勤務。結婚を機に退職。2014年より作文添削員としてミオン株式会社に勤務。2018年に作文添削技修士準一級を取得し、年間約1500枚の小・中学生の作文添削を行う。2019年4月より、ぼこあぼこ音楽教室にも勤務し、週二回ピアノの個人レッスンを行っている。

「私の中国物語」その③

## 中国の朝、公園で思うこと

漫画家 池乃大

私にとって中国とは太極拳だ。どこで見たのか、広大な場所で大勢が太極拳をしているところを思い浮かべる。皆、揃いの色の表演服を着て一糸乱れぬ様子は圧巻だ。ゆったりと、その動きは大河の流れを感じさせる。二胡の音色も聞こえてきそうだ。まるで地球が呼吸しているかのような、そんな光景が浮かぶ。

これらは私が、太極拳を学び始める前から抱いていたイメージだ。私は中国には壮大なスケールと武術という2つの印象を子供の頃から持っている。おそらく昔観たカンフー映画の影響だろう。中年以上の男性であれば、誰も子供のころにカンフーの真似事をして走り回った記憶がある。

太極拳も本来武術である。実際陳式太極拳には激しい動きや素早い打撃技が套路に多く含まれている。太極拳の持つ老人の健康体操というイメージは1つの側面ではない。中国には常勝無敗を誇る太極拳の達人の伝説がいくつもある。しかし太極拳が優れているのはそのような物理的な強さではない。太極拳の動きは芸術である。そして太極拳への理解は哲学である。その2点が太極拳と西洋の格闘技との違いだ。効率よく合理的に敵を倒すこと以上の、思想に基づいて作られたのが太極拳である。流転する陰と陽、自然法則との調和、それを武術に取り入れたのが太極拳。自然法則を理解することがすなわち太極拳の道といえる。しかしその道を極めるには人の一生はあまりに短い。先人が蓄積してきたものを理解し後人へと繋ぐことでしか極めるすべはない。それゆえ、底なしに突き詰め切れない奥深さがある。私はそこに魅了される。

3年前、私は初めて上海に行った。早朝の魯迅公園は賑わっていた。太極拳、太極扇、社交ダンス、皆様々に楽しんでた。広場に整然とうねる太極拳の大波。思い描いていた中国がそこにあった。日本では目にしない光景だった。住み慣れた地元であればせいぜいジョギングしている若者をみる程度だ。私は試しに太極拳をしている集団の端で、一緒に太極拳を試みた。その当時、私はまだ太極拳を学んでいなかった。見よう見まねで、さぞ不恰好だったことだろう。ただそれを咎めたり笑う者

はいなかった。初めての国で知らない者の輪に入り、できもしないことをする。日本での自分からはおよそ考えられないことだった。しかし中国の大陸的な大らかさが私にそのような行動をとらせた。周りの中国人は別段私を気にする様子もなかった。それが私には中国人の寛容さに思えた。

たった3日間の中国旅行であったが、その印象は深く刻まれた。特に魯迅公園には毎朝通った。皆が生き生きと自由を満喫する姿、こういう空間を日本にも作りたいと思った。しかしどうすればよいのかわからなかった。帰国後、試しに私は早朝の公園で太極拳を試みた。数週間続けてみたが依然独りだった。自然と人が集まるかと思っていたが、そうはいかなかった。民族性の違いだろう。日本人は人前で人と違うことをするのを好まない。

1年前にもう一度上海へ行った。この時行った江浦公園はごく小さなものだった。しかしそれでも太極拳や書道を楽しむ人で賑わっていた。このときも私は、なぜ日本ではこのように盛り上がらないのかを考えていた。ひとつ気付いたことがあった。それは中国人は自己のアピールに遠慮も照れもないということだ。例えば太極拳なら、自分の技がいかに素晴らしいかを人前で披露することにはばからない。人を見て、別の者がまた負けじと披露する。そうやって筈のように競い合って技を磨く。



上海、魯迅公園の朝

そう思いながら公園を見渡すと、実に様々な太極拳があった。太極拳には五大流派がある。陳式、楊式、呉式、孫式、武式がそれだ。その他にも様々な細かい流派はある。しかし陳式ひとつとっても、全く別物のようなものがいくつも存在する。師匠と弟子で印象が大きく異なるケースも多い。日本では、亜流の太極拳はあまり好まれない。しかし中国では、独自の解釈による様々な亜流が認められているように感じられた。クセの強い、独特な太極拳もその公園では多く見られた。自分の太極拳は間違っているのではないかと微塵も感じられない。自信に満ちた力強さがある。やはりこの国では、我こそはと出る杭が歓迎されるのであろう。

私は43歳から太極拳を始めた。それまで運動らしい運動はしてこなかった。太極拳の素質も身体的能力も乏しい。だがそれでも、太極拳で人に認められたいのである。たった2度の中国旅行が、大陸の空気が、そんな子

供じみた願望を許容してくれる気がするのだ。幸いなことに、太極拳の選手寿命は長い。60歳でも若手である。願わくばいつか自ら編み出した太極拳で、中国の公園で、他の老人と、誰の太極拳が一番優れているかというようなことをやってみたい。子供の意地の張り合いのようなことを、100歳になっても続けていきたいのだ。それが許される場所がある。一生現役で居られる場所、それが中国の朝の公園なのだ。

#### 池乃大 (いけの だい)

漫画家、ゴム銃作家。1973年京都府生まれ。40歳を目前に中国語を始める。以来中国にハマリ、太極拳、花文字、中国語カラオケなど、文化を通じて中国のことを学んでいる。2017年より中国語学習者向け月刊誌『聴く中国語』の漫画、パン君奮闘記を担当。2016年に関西外国語大学孔子学院主催『第7回西日本地区中国語歌唱コンクール』一般部門3位。太極拳一級。主な著書に『路上に蹲る絵描き達』、『ゴム銃保安官弾』など。

#### 「私の中国物語」その④

## 「ナンチエンジュ」を通るたびに思い出す、 あの人たちと僕の居場所のこと

記者 高橋 史弥

「ナンチエンジュだよ、もう少しであそこに店を開けたのになあ」。

一体何のことだか、全く分からなかった。

上海・復旦大学のキャンパスから、道を挟んで向かいの二階にある飲食店。50代くらいの店主は、くたびれた常連客の学生が日本人だと知ってからというもの、仕事をサボっては「ナンチエンジュ」への未練を語るのが習慣になっていた。

2010年に上海での留学生生活を始めてから、この店が僕の居場所になるまでそう時間はかからなかった。キャンパスから近いのもあるが、何より安い。お気に入りの「滑蛋牛肉飯」は6元だ。塩味が効きすぎているのが僕の好みだった。

ほぼ毎日やってきては同じメニューを頼む日本人は、ほどなくして店主の好奇の対象になってしまった。店員も僕が注文をするより前に、顔を見ただけで厨房を振り

返り「滑蛋牛肉飯！」と叫ぶ。どうせいつも同じものを食べるからだ。5元ほどするココナッツミルクも勝手についてくる。後ろめたさではないが、店主が絡んできて断れなくなった。

だが実際は、仕事をサボる口実を見つけた店主よりも、助けられていたのは僕だったのかもしれない。

全てが順風満帆な留学生活ではなかった。本科生として留学したため、授業も試験も全て中国語だった。それに、単位を落とせば留学を続けられなくなるプレッシャーもあった。そんな状況で、日本人の先輩たちと仲違いを起こした。

やれることは何でもやる、そんな自分の意気込みを「人生疲れるよ」と一笑されたのに反論したことがきっかけだったと思う。「生意気な後輩」への制裁は簡単だ。レポートや試験対策の輪から外してしまえば良い。追撃とばかりに、先輩のブログには僕を名指して批判する記

事が並んだ。見るのも嫌になった先輩たちのにやけ顔は、布団に潜っても夢の中にまで出てくる始末だった。

そんな僕にとって、いつもと変わらないあの店はどれほど貴重な存在だったかと思う。滑蛋牛肉飯はいつも塩味がきついし、店主はこっちの気持ちなんてお構いなしに聞き取りづらい方言で「ナンチエンジュー」への思いを語り続けるし、店で飼っていたトラ猫は僕のご飯を狙ってくるし。そこにあるのはいつもの光景でしかなくて、思い出したくもない先輩の顔も、ブログの文面も、不思議と店の中までは追っかけてこなかった。

結局僕は、中国人の友人に助けてもらうことで、無事に復旦大学を卒業できることになった。帰国の前の日、友人が送別パーティーを開いてくれた。楽しかったが、朝までコースはやめにした。どうしても行きたい場所があったからだ。夜10時ごろ。上海の中心地はこの時間でも昼のように明るかったが、大学の周りにはもう真っ暗で人気もない。キャンパス目の前の道路を渡り、木製の階段を登っていく。通算100回を超えているのに、どんな顔をしていいかわからない。店の扉を開けると、僕以上に表情に困っている店主と家族が待っていた。

閉店後の店内はしんと静まり返っていて、それにつられて僕たちも言葉少なになっていった。「明日帰るのか?」「そうだよ」同じ会話を何度も繰り返した。思えば、この日々には終わりがあるなんて考えたこともなかった。僕たちにとっては突然「最後の夜」が来たような気持ちで、話す内容が浮かんでこなかったのかもしれない。紙とペンを渡される。当時はウィーチャットがなく、仕方なくメールアドレスを書いて返した。多分、メールなんか送ってこないだろうな、とわかってはいたけれど。

何時間そこにいたかは忘れてしまった。ただ翌日、日本へ帰る飛行機に乗り込む時、全身を透き通るような満足感が包んでいたのを今もはっきりと覚えている。僕にまわりついてきた、消えないインクの染みのような悪意は、もうそこにはなかった。

上海は、飲食店の入れ替わりが極端に激しい。だから、帰国して2、3ヶ月後に、あの店のあった場所が空っぽになってしまったのを耳にしても驚きはしなかった。メールボックスを何度か見直したけれど、店主からのメールは来ていなかった。

今はもう、店主と連絡を取り合う方法はない。それでも別に寂しくはない。目を閉じて、思いを馳せれば、あの滑蛋牛肉飯の、ちょっと危機感すら感じる塩味が浮かんでくる。それで十分だ。きっとあの味を通じて僕と彼らは今もつながっている。彼だって、どこかで飲食店をやっているならば、滑蛋牛肉飯を注文されるたびに、あのくたびれた日本人を思い出すだろう。

それでも、日比谷線に乗ると、ふと彼らを思い出す時がある。電車が南千住に到着する。もしかしたら彼は一度は破れた夢を叶え、ここに店を構えているかもしれない。そしたら、駅くらい使うような、そう思いホームを見渡してしまう。懐かしい顔が見つかることはない。それでも、あの日々が笑いかけてくれたようで、僕もちょっと笑いながら、また次の駅へ向かっていく。

#### 高橋 史弥 (たかはし ふみや)

1990年東京都世田谷区生まれ。高校1年生から中国語学習をはじめ、早稲田大学法学部在学中の2010年から復旦大学新聞学院コミュニケーション学科へ本科生留学。2013年に同大学を卒業。卒業後はNHKに記者として入局し静岡県や長野県で勤務。2019年よりハフポスト日本版ニュースエディターとして、中国・東アジア、外国人との共生に関する取材を担当。



食堂のマスターと私